

オ	ー	ル	・	オ	ア	・	ナ	ッ	シ	ン	グ								
新版K式発達検査をめぐって												その⑮							
												大谷 多加志							

今年度に入ってから、色々な場所でK式についてお話させて頂く機会を得ました。題材は全てK式ですから、同じような話を別々の場ですることもあるのですが、相手や場面が違ふとやはりこちらが伝えるべき内容や、その内容を伝えるための工夫も違ふように感じて、色々と試行錯誤をしているところです。そういう意味では、色々な場でお話する機会を得たことで、これまで以上に様々な観点からK式について考え直すことができたように思います。

ここ最近、選挙の季節ということなのでしょうが、テレビをつけると、参議院議員選挙やアメリカ大統領選挙のニュースをよく目にするようになりました。アメリカ大統領選挙では、当初は泡沫候補とされていたトランプ氏が、今や支持率トップになるまでの快進撃を続けています。トランプ氏が支持される理由には、色々な要素があるのでしょうか。ニュースや新聞などで分析されているものも見かけます。そのような論評の中で、トランプ氏の「主張の明快さ」が、支持される要因として挙げられているのを見ました。しかし、その主張の中身は「100%費用負担するか、さもなくば撤退だ」というようなことだったりするので、言い換えて極端な主張と言う方がぴったりなの

かもしれません。極端な主張や考えは、わかりやすく、一面では正しさや正当性を持ちます。しかし、その事柄にまつわる多様性や経過、いきさつ、それに関わる人々の感情や立場などを、一面的な正当性により「関係ない」とバツサリ切り捨ててしまうものでもあります。トランプ氏の快進撃を見ていると、このような主張が受け入れられ、支持されやすい土壌が、今の世界に広がっているようにも思えます。そんなことを考えながら頭に浮かんだのが、この「オール・オア・ナッシング」という今回のテーマです。

「発達」や「発達検査」に関わる中でも、時にこの「オール・オア・ナッシング」、言い換えるなら「極端さ」を感じる場面に出会うことがあります。今回は、発達臨床における「オール・オア・ナッシングに思える場面」について、頭に浮かんだことを書いてみようと思います。

遺伝か環境か、怠けか障害か

知能の決定要因が遺伝か環境かという論争は、知能研究の初期の一大テーマでした。一般的な感覚としては、学業優秀な親のもとに優秀な子どもがいるというのはイメージがしやすく、遺伝的な要因があるという

ことは感覚的には納得しやすいかもしれませんが。一方、環境的な要因があることも、それはそれでもっともらしく感じます。塾に通う子の方が、塾に行かない子より成績が良くなるような気がします。さらに、学業優秀な親だからこそ、学業に対しての関心が高く、学習のための環境を整える傾向が強い、つまり環境要因が整いやすいという側面も考えられます。知能に関する「遺伝か環境か」の論争は、一般的には両方の要因がある、というところで落ち着いているようです。

現在の発達臨床の場で「遺伝」が話題になるのは、やはり発達障害に関係する場面です。兄弟や一卵性双生児の自閉症の発生率に関する研究によって、自閉症スペクトラム障害には、一定の遺伝的要因があると考えられています。遺伝的要因があるということで、深く悩まれる保護者の方もおられます。自分が悪かったのではという自責の気持ちを持たれたり、第一子に自閉症スペクトラム障害の診断が出たことで、それまでは希望していた第二子について迷い始めた方もおられました。

また、親子で似たような特性を持つておられるという場合もあります。子どもの相談で来たのだけれど、お話を聞いていると保護者の方も色々と苦勞されていることがあり、それが発達障害の特性から生じていると思えるケースもあります。

最近、少し気になっていることがあります。事例検討会などでディスカッションをしていると、ふと「実は親御さんも似た傾向があつて…」という言葉があり、そこで『道理で難しいはずだ』と納得してしまう空気が生まれるように感じるのです。も

ちろん、保護者の方が発達障害をお持ちの場合もあると思います。保護者の方が発達障害の特性を持っておられるなら、支援者はそれを踏まえた対応や環境調整によって、必要な支援が行えるように考える必要があります。しかし、『道理で・・・』という空気の中、遺伝と環境の、遺伝の話だけでなんとなく話が落ちてしまうような印象を受けることも、少なからずあります。

「怠けか、障害か」というのも、古くからのテーマです。“障害であるならば現状を認めるが、障害でないならばきちんと指導しないとイケないから、発達検査や医師の診療を受けるように！”と先生に言われて相談に来られた方の話を、何度か聞いたことがあります。最近でこそあまり見かけなくなりましたが（つまり、今もたまには見かけますが）、結果的に自閉症の診断が出た途端に、“自閉症＝集団の活動への参加は難しい！”という風に思い込み、集団活動への促しをすっかりやめてしまう、というような対応になる場合もありました。これもやはり、極端です。

能力があるか、ないか

次に、発達検査のことに話を進めます。講習会などでよくある質問の1つに「それぞれの課題は、子どものどのような能力を測定しているのか？」、「〇〇の項目を通過したら、どういう能力があると言えるのか」というものがあります。いつもどう答えたものかと思案し、慎重になる質問です。素朴な質問ではあるのですが、下手をすると「〇〇の項目に通過していたら〇〇の能力があり、不通過なら〇〇の能力がない」と

いう極端な解釈を生む恐れがあるように思うからです。

人の能力とはそもそも、「ある」「ない」の2択で割り切れるものばかりではありません。例えば「発語」を例に挙げれば、まったく言葉がない時期と、流暢におしゃべりする時期との間に、まったく発語がないわけではないけれどもまだまだ頻度は少なく、促しても言ったり言わなかったり、少なくとも主たるコミュニケーションの手段にはなっていない、という時期も存在します。この時期も「ある」「ない」で2分すれば「ある」に属するのですが、その発語の能力は、特定の場面や状況に限って表れるものとも言えるかもしれません。検査場面や検査課題も、ごく限られた場面、状況に過ぎません。この場面での成否（通過・不通過）だけで何かを断言することは性急だと言えるでしょう。

さらに、項目の成否を能力の有無と結びつける考え方は、別の混乱を生じさせる原因にもなります。例えば、「〇〇に関する能力を有する」ことが検査場面以外の子どもの様子から明らかであるのに、検査場面で「〇〇の能力の有無を測定している」とその検査者が考えている項目に、不通過の反応が見られる場合もあります。このようなケースに対して、検査者によっては「能力はあり、検査場面では能力以外の要因で課題に応じなかつただけだから、通過として評価する」と言う方もいれば、「そもそも能力がある子がうまく応じられないような課題状況（設定）が悪い」「その子に合うように、課題状況を改変して実施しようと思うがそれで構わないか」という不満を漏らされる方もいます。私自身は、上記のような

評価や対応の仕方をするには慎重であるべきだと考えています。このような対応をすれば、発達検査は単なる「能力測定検査」になってしまうように感じるからです。

発達検査でみているものは？

もちろん、発達検査の課題をクリアできるかどうかと、子どもの発達状態、あるいは能力は無関係ではありません。また一般的に、能力は獲得されてから徐々に安定して発揮されるようになっていき、場面や状況の影響を受けにくくなっていきます。例えば、「自転車に乗る」という能力で考えれば、ひとたび安定した能力が形成されれば、多少タイヤのサイズが違う自転車や、他人の自転車に乗る場面があっても、それなりに適応して運転することが可能なはずです。

一方で、獲得したスキルや能力を、色々な状況で用いることが苦手な人もいます。自閉症スペクトラム障害の特徴の一つに、「般化」の難しさが挙げられます。いつもの手順のうち、一部でも変更があると混乱し、普段使っているスキルや能力を応用して用いることが困難だったりします。このような人の場合、「〇〇の能力がある」ということと同じくらい、「ある状況ではできることが、別の場面では困難になる」という情報が、支援を考える上で重要になります。ひとくくりに「〇〇の能力はある人です」とまとめてしまうことは、支援のポイントを却ってわかりにくくしてしまうことにつながるかもしれません。

発達検査を通して検査者がみているものは何でしょうか。もちろん、通過、不通過

の評価をするために子どもの行動や課題への反応を観察しています。その時、行動レベルで何をしたのかを見ていますが、同時に「子どもからは、この課題状況がどう見えたか（どう理解されたか）」ということに想像をめぐらせてもいると思います。この想像は、あくまでも観察した事実から膨らませていきますから、勝手な妄想とは違います。しかし、実際に「こう見えていたよね」と子どもに答え合わせをすることもできないので、自分の中で仮説として保持しておいて、その後の行動観察や保護者とのお話の中で修正しながら、検査所見のまとめや検査報告などに反映させていくこととなります。

答えのないものについて考え、自分なりの仮説を持つこと。仮説という不安定なもの、言い切りもせず、捨ててもしまわないという、敢えて言えば中途半端なところで踏ん張れること。冒頭で述べた「極端な意見」とは対極ですが、対人援助の場で大切なことはこういうことなのではないかと思っています。

- 第19号 行動の発達の意味と機能
- 第20号 K式をめぐる私ごと
- 第21号 改訂に向けて
- 第23号 発達相談①
- 第24号 発達のアンバランス

バックナンバー

- 第10号 発達検査でわかること
- 第11号 通過・不通過
- 第12号 解釈・見立て・所見
- 第13号 検査手続き
- 第14号 導入
- 第15号 発達検査でわかること②
- 第16号 発達検査のもつイメージ
- 第17号 発達心理学用語講座 (K式編)
- 第18号 発達心理学用語講座 (K式編②)